

芦屋大学論叢 第74号
(令和3年3月22日)抜刷

課外活動における一貫指導システム構築の現状と課題

—芦屋学園サッカー部門の改革事例から—

金 相 煥
別 當 和 香

課外活動における一貫指導システム構築の現状と課題

－芦屋学園サッカー部門の改革事例から－

金 相 煥
別 當 和 香

1. はじめに

日本の競技スポーツは、課外活動を中心とした学校教育システムの枠内において発展してきたものが多い。すなわち学校の教員が直接の指導に携わり、学校施設を優先的に活用し、さらには競技会の企画と運営までもが学校教育の仕組みの中でおこなわれてきた。高等学校では「財団法人全国高等学校体育連盟」が、中学校では「財団法人日本中学校体育連盟」が、それぞれ参加各競技団体と連携しながら全国大会の企画運営をおこなっている。こうした学校体育システム主導におけるスポーツ教育は、成長期における競技者の育成という観点では弊害も存在する。各カテゴリーの指導者は、その殆どが学校教員であるため、それぞれ自分与えられた数年間の中で選手を育成し、チームとして完成させることを指導目標の中心に据えなければならない。従って、多年度に渡る個々の選手の発達段階を意識した指導スタイルを確立することは難しく、個々の技術や戦術に対する各選手の十分な発達が期待できない可能性がある。このような背景から、少子化問題や経済状況なども鑑み、近年ではその基盤を地域に移行しようという動きが加速している。文部科学省が策定した「スポーツ立国戦略」をみても、ライフステージに応じたスポーツ機会の創造を地域で行い、社会全体でスポーツを支える基盤を整備する施策が明記されている。

芦屋学園のサッカー部門に関わる芦屋大学サッカー部および芦屋学園高校サッカー部は、筆頭著者が2006年の就任時から14年が経過した。今年度（2020年度）は総勢300名を超える部員数であり、2010年から構築してきたサッカー部門における一貫指導システムにより、募集人数増加と学校経営安定の成功に至った。この背景には、多様な目的をもってサッカー競技を含んだ進学を選択する中高生の受け入れをおこなったことや、部活動改革をおこない、人間力向上のためのインターンや実践演習などを取り入れたことによって、部員の教育意識やサッカー面での理解が促進されたことなどが挙げられる。サッカーにおける一貫指導に関する研究は、他競技とサッカーの一貫指導システムを比較検討する研究¹⁾や諸外国と日本の一貫指導プログラムを比較する研究²⁾などが行われている。しかし、課外活動における一貫指導システムに着目した研究はない。

そこで本研究では、芦屋学園サッカー部門の改革事例を分析することで、一貫指導システムをより効率よく展開するための課題を明らかにし、サッカー競技を含む課外活動における一貫指導システム構築のための有用な知見を得ることを目的とした。

2. 芦屋学園一貫指導システムの構築過程

2.1 一貫指導システム構築に至る経緯

芦屋学園との出会いは、2006年に芦屋大学附属高校（現芦屋学園高校）の校長と高校時代の恩師の紹介により、高校サッカー部の非常勤コーチとして就任したことである。当時の高校サッカー部は、週1回の指導

から始まり、年を重ねるごとに段階的に指導回数を増やしていった。その後、3年が経過し、就任初年度に入学してきた生徒が大学に進学するに当たり、芦屋大学での教鞭を執る運びとなった。芦屋大学附属高校では、国際文化科に男子生徒を募集し部活動を活発化させた。さらに、高大連携による学園の活性化を図るため芦屋大学への内部進学を促した。2010年の大学への採用は、いわゆる学園組織で進学実績を残したことによる着任であったことが示唆される。

高校サッカー部コーチ就任当初のサッカー部生は4名～6名程度。グラウンドは芦屋市高浜町にあったクレー(土)のピッチでの活動が原点である。(2016年以降は芦屋市陽光町の人工芝グラウンドに移転)選手は少なく、試合もできない状況であった。試合経験を積ませるため、当時須磨学園高校サッカー部の監督であった許泰萬氏(2010年から芦屋学園高校監督に就任)に選手を借りて試合をおこなったり、近隣の芦屋国際高校と合同練習などをしながら活動をおこなっていた。メンバーも少なく、試合は負け越すことが多かった。芦屋市の予選で県立芦屋高校に0-24で敗退するなど、低いレベルからのスタートであった。このような知名度の低い芦屋大学附属高校(現芦屋学園高校)を知名度の高いチームにするためにはどうすればよいのか。まず、第一に考えたことは、選手の確保であった。生徒数を増やし、練習を重ね強化を図るしかないと考え、まずは新入生募集に奮闘した。しかし、単独で生徒募集をおこなっても、本学の学力や芦屋の地域性などから、すぐに生徒が集まるまでには至らなかった。そこで、歴史的な背景や現状を考察し、芦屋学園独自の募集体制を考案することとした。さらに、知名度の高い・安定したチームを作り上げるためには、高大連携及び地域ぐるみの一貫指導システムの構築が必要であることが示唆された。

2.2 芦屋学園を発展させるための具体的対策

長期に渡る競技者育成プログラムは、国際的にはLong Term Athlete Development(以下LTAD))と定義され、多くの研究と実践が報告されている。Bayliは、スポーツ競技種目を早期完成型(早熟型)と長期完成型(晩熟型)に分類し、それぞれについて発達段階に応じたモデルを開発した。それによると球技は晩熟型に分類され、競技の導入から引退に至るまで6段階のステージを経て育成すべしとされている(表1)。彼のLTAD理論に基づいた長期型育成プログラム開発の取り組みは、Alpine Canada(カナダアルペンスキー協会)、English Cricket Board(英国クリケット協会)、British Swimming(英国水泳協会)など世界各国の様々な競技スポーツ統括団体において実施されていることから、異なる社会的文化的環境下においても共通する優れたモデルとして考えられる。³⁾

これらの資料より、芦屋学園は小学校を除いて、すべての教育機関を保持している学園であることを鑑み、日本サッカー協会が提唱する一貫指導システム⁴⁾を構築していけるのではないかと考えた。当時、兵庫県において、勉学の分野では中高・高大の一貫校や一貫指導は存在しているが、スポーツ分野や課外活動で一貫指導している学校は少なかった。また、「大学教員とは『研究と教育と社会貢献』だ」と当時の師匠に教えられたこともあり、サッカー部門で一貫指導システムを構築し、その中に教授の場や芦屋市と芦屋市周辺地域(神戸市、西宮市)、延いては兵庫県又は関西圏を巻き込んでの人材育成と組織発展に繋がる社会貢献の場を形成することで、生徒・学生の増加及び満足度向上、学園サッカー部門の強化及び充実、芦屋学園の発展へと繋がると考えた。また、この体制の基盤を作り上げることで、サッカー競技に留まらず、課外活動における一貫指導システムの構築へと発展させていくことも考慮したため、この体制が始動した。

表1 晩熟型競技における6段階の育成モデル

	ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4	ステージ5	ステージ6
名称	ファンダメンタルの段階	練習を学習する段階	トレーニングを練習する段階	競技のトレーニング段階	勝利を目指したトレーニング段階	リタイヤ期
目的	あらゆる基本的な運動スキルの学習	あらゆる基礎的なスポーツスキルの学習	持久力と筋力の基礎作り	競技に必要なフィットネスの最適化	フィットネスとスキルにおいて競技人生最大レベルの確立	コーチや役員としての貢献
男子	6歳から9歳	9歳から12歳	12歳から16歳	16歳から18歳	18歳以降	
女子	6歳から8歳	8歳から11歳	11歳から15歳	15歳から17歳	17歳以降	
概要	競技に特化した技術を始動する以前に、様々な基本的な運動スキルを学習させる。活動は全て積極的かつ楽しみを持って行なえるように工夫されなければならない。スポーツのABC(アジリティ、バランスコーディネーション、スピード)をあらゆる活動を通して発達させる。	長期教育が必要なスポーツにおける早熟化はさまざまな弊害をもたらす。ステージ1を十分に開花させた後で、スポーツ技術についての学習をさせるべきである。	持久力が加速して成長する時期である。スピードやスキルは引き続いて育成するが、身長増大速度がピークになる時期であることを考慮し、持久的な能力の地盤を固めることが重要。この時期の練習において過度に競技に時間をかけてしまうと十分な発達が期待できない。	試合を強く意識したトレーニングの時期。ポジションや試合のスケジュールなど、より個人の状況に配慮した質の高いトレーニングが年間を通じて行なわれる。選手は、既に学んだ様々な能力を、どんなコンディションの下であっても発揮できるようにトレーニングされる。	培ったパフォーマンスを最大に発揮させるために、全てのトレーニングが計画される。国際大会最大の能力を発揮できるようにする。	引退後は多くの選手が指導者、競技役員、マスターズ、個人経営などでその競技に関わる。
活動頻度	専門種目の活動は週に1~2回にとどめ、他のスポーツを積極的に週3~4回行う。	練習と競技の割合は7:3程度が望ましい。	練習と競技の割合は6:4程度が望ましい。	練習と競技の割合は5:5程度が望ましい。	トレーニングと競技の割合は1:4になり、あくまでも競技が中心となる。	
発達段階	5秒以内の敏捷性が急激に開花	スピード、柔軟性への配慮	体格の急変に伴う柔軟性に配慮			

(原(2005)より引用)

3. 高校サッカーの現状

3.1 全国レベルの部員数

2020年度の高校生における2大スポーツ(サッカー・ラグビー)の全国大会において好成績を果たしたチームの傾向を調査した。サッカーは全国ベスト8(表2)、ラグビーは全国ベスト4(表3)のチームの部員数である。

サッカーではベスト8中、6校が私立、2校が公立。ラグビーは3校が私立、1校は各種学校であった。種目は違うが、出場選手が11~15名のスポーツにおいて全国レベルになると100名の部員数がほぼ半数以上を占め、ラグビーの1校以外は1学年20名を優に超える在籍数、サッカーで一番多かった214名の部員数を誇る高校は1学年が70名程度の計算になる。35人クラスに換算すると教室2つ分であり、3学年でトータル6クラスがサッカー部となる大所帯の学校であるということが伺える⁹⁾。

表2 第99回全国高校サッカー選手権大会 best 8 の部員数

高校名 (地域)	YG 高校 (山梨)	S 高校 (埼玉)	F 高校 (千葉)	T 高校 (新潟)	Y 高校 (栃木)	T 高校 (富山)	H 高校 (東京)	A 高校 (青森)
部員数	129	168	92	129	175	145	79	214

表3 第99回全国高校ラグビー選手権大会 best 4 の部員数

高校名	T 高校 (神奈川)	O 高校 (大阪)	K 高校 (京都)	H 高校 (福岡)
部員数	102	39	123	135

3.2 高校サッカー選手権の傾向

全国高校サッカー選手権大会の過去7年間（93回～99回）のベスト8チームの一貫指導システムと地域性を調査した。図1より、連携による一貫指導システムにより好成績を収め、中学+高校、高校+大学の連携の構図から、高校+クラブチームといった地域とコラボレーション（連携）した環境のチームが上位に名を連ねている傾向がみられる。また、1993年から1995年までは、中高・高大の一貫指導システムを構築した高校が上位を占めている。しかしながら、1996年を境に高校単独で下部組織としてクラブチームと提携または独自で下部組織を作ることによって成果を上げている高校が現れてきた。⁶⁾ また、図2の結果から、都市圏の高校は安定した成績を取れており、次には東北地方や中部地方の高校がベスト8に名を連ねてきている。これは、チームの底上げと同時に地域との関係性づくりに着手したことが、高校年代での成績につながっているといえる。この地域に根付いた育成モデルの形成により、地元での選手集めが「生徒数の確保」へと繋がる。そして、これが広く地元からの応援や協力をいただける環境づくりに発展し、「宣伝効果」へと繋がっていくことが示唆された。このように、高校単独で下部組織としてクラブチームと提携又は独自で下部組織を作ることによって成果を上げている高校が増え始めた。同時期に、2018年度に芦屋学園高校においても、下部組織として芦屋学園フットボールクラブを立ち上げ、学園事業として併設させることとなった。

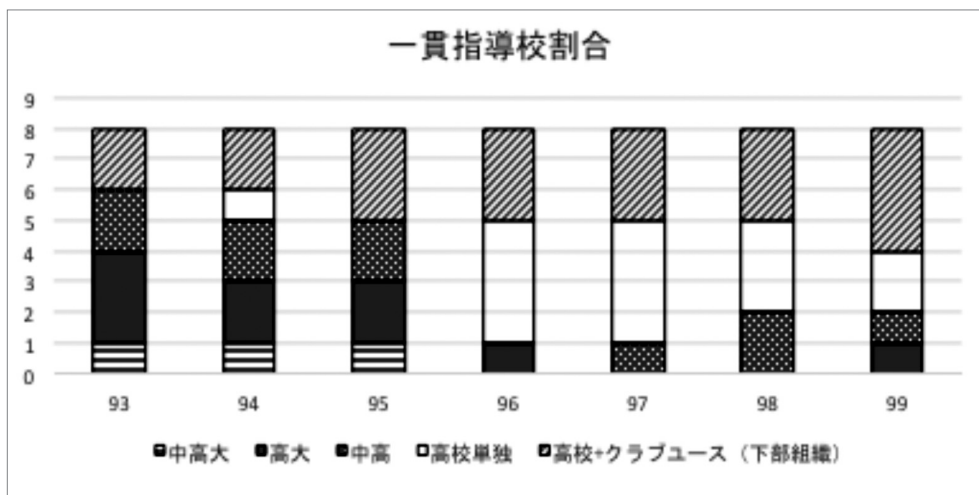


図1 大会ベスト8の一貫指導校割合（93～99回全国高校サッカー選手権大会）

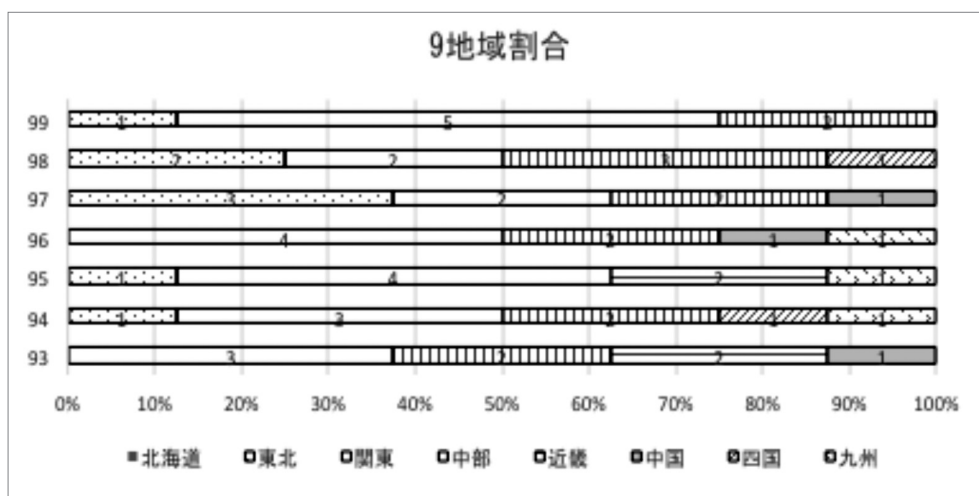


図2 大会ベスト8校の9地域割合（93～99回高校サッカー選手権大会）

3.3 高校サッカーとクラブユースの比較

3.3.1 比較方法

高校サッカーとクラブユースの勝敗の比較をおこなうために、高校サッカーとクラブユースの両方を含む高校生年代のトップを決める高円宮杯プレミアリーグの2011年から2019年までの9年間、全1620試合の勝敗を分析した。しかし、この中には高校 vs 高校（156試合）、クラブユース vs クラブユース（678試合）合計834試合が含まれており、これらの試合を除外した高校 vs クラブユース（786試合）を分析した。試合結果は <https://soccer-db.net/>より取得した⁷⁾。

3.3.2 結果

表4・表5の結果から、9年間の合計ではクラブユースの方が勝ち越しているという結果であった。しかし、図3の時系列的な結果を見ると、高円宮杯プレミアリーグが発足した当初の2011年からの4年間は大きな差があったものの、近年ではその差が縮まってきている事が見て取れる。それは、図4・図5の勝利数の上昇傾向、負数の減少傾向のグラフからも示唆できる。ただし、ここで9年間勝ち越している高校は、3校（青森県A高校・福岡県H高校・茨城県R高校）のみであった。

表4 高校 vs クラブユースの全1620試合の勝率割合

	勝	引	勝	
高校	368	322	930	ユース
高校	23%	20%	57%	ユース

表5 高校 vs クラブユース786試合の勝率割合

	勝	引	勝	
高校	242	147	397	ユース
高校	31%	19%	51%	ユース

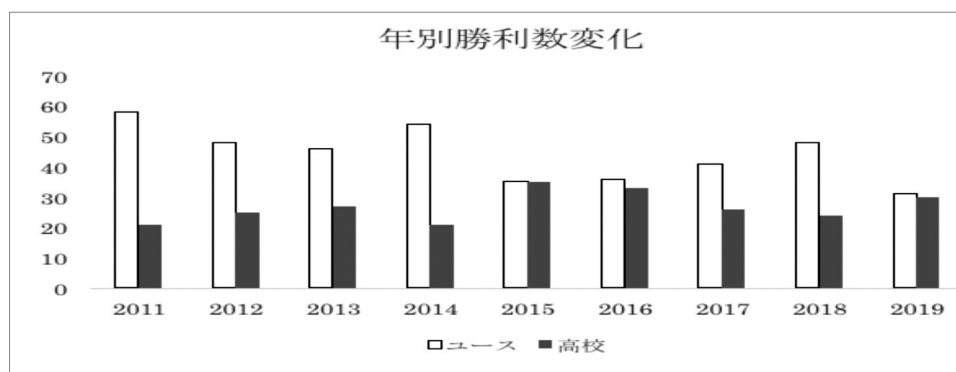


図3 高校 vs クラブユース 年別勝利数変化

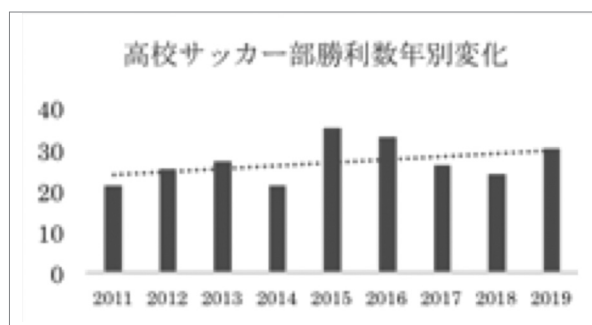


図4 高校 vs クラブユース 高校サッカー部勝利数年別変化

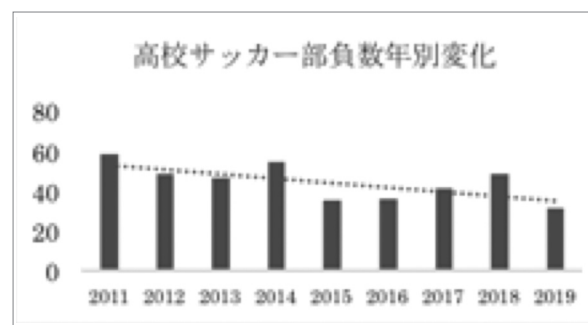


図5 高校 vs クラブユース 高校サッカー部負数年別変化

4. 芦屋学園サッカー部門の実績

4.1 高・大サッカー部における部員数の経過

芦屋大学附属高校（現芦屋学園高校）サッカー部は、服部元氏（現 MIHO 美学院中等教育学校 教頭）が部長・監督を務めており、2006年度から、非常勤コーチとして着任した。週1回のペースでサッカーの技術指導をおこなった。その後、生徒募集を平行しておこない意欲的な生徒が増加したこともあり、2007年度には週2回、そして2008年度には週3回と指導回数を増加して練習をおこなっていた。表6からもわかるように、2006年度以降の生徒数は増加傾向にあるといえる。2010年度は、大学教員に就任した年であり、大学サッカー部を指導する移行期間であったため、生徒数が減少傾向にあるが、2011年度から許泰萬監督が就任したことで、高大連携を図ることができた。表7は2011年度以降の高校サッカー部の部員数である。この結果から、入部数の確保や増加が示唆された。特に、高校においては2015年以降、急激に部員数が増加している。表8は大学サッカー部における部員数である。大学就任後10年が経過し、この間の学生募集においては、全額免除で入学した学生が3年時編入（2年間）で1名、半額免除で入学した学生は隔年で2名程度の割合で入学勧誘をおこなってきた。毎年4学年合わせても8～10名程度の特待生しか募集せず、学生募集の際に、学費を払ってでも芦屋大学への入学と芦屋大学サッカー部への入部を志願するものを受け入れるよう、できる限り努めた。例年リクルート活動には全力で取り組み、さらに2012年度に3部から2部Bに昇格したことを契機に、下部組織である芦屋学園高校からの進学とその他の高校から進学する流れが確立された。また、2019年度には2部Bから2部Aへと昇格し、2020年度の入部数は前年度を大きく上回るものとなった。

表6 金監督就任後の部員数(人)

部員数	2006	2007	2008	2009	2010	2011
3年	1	6	2	4	6	8
2年	6	3	4	9	9	3
1年	4	6	10	10	3	10
合計	11	15	16	23	18	21

表7 許監督就任後の部員数(人)

部員数	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
3年	2	6	17	14	18	20	26	30	36
2年	7	19	16	20	20	26	34	36	39
1年	22	24	25	23	30	34	47	44	53
合計	31	49	58	57	68	80	107	110	128

表8 大学サッカー部における部員数(人)

部員数	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
4年	2	7	13	18	13	22	14	5	14
3年	7	13	18	13	22	14	5	15	18
2年	13	18	13	22	14	5	15	18	21
1年	18	13	22	14	5	15	23	29	27
合計	40	51	66	67	54	56	57	67	80

4.2 高・大サッカー部における成績の経過

4.2.1 高校の成績

前述の通り、2010年度からは許監督が高校サッカー部を率いた。表9は2011年度から現在までの大会成績である。顕著な結果としては、2015年度の選手権大会準優勝であり、決勝はテレビ放映されている。その映像を観戦した中学生から、「高校は『芦屋学園高校』でサッカーをしたい」と志願する生徒が増加し、中学の教員又はクラブチームの指導者との交流機会が多くなった。その根拠として、2016年度以降の1年生入部数が増加している(表7)。また、優秀な中学生が継続的に進学することとなり、現在では、県大会においてベスト16からベスト8が常時継続できる力を付けている。

2019年度には兵庫県内の3大会である新人戦において優勝、インターハイでは準優勝、選手権は県大会ベスト8で敗退したが、3大会において芦屋学園高校サッカー部最高の成績を収めている。着実に力を付けている傾向が成績に表れており、チーム目標である全国大会出場を達成できる日も間近である。

表9 兵庫県3大会での成績(2011～2019年)

大会名/年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
新人戦	不参加	不参加	地区敗退	地区敗退	地区敗退	県大会 best16	県大会 best8	県大会 best8	県大会 優勝
インターハイ	Best32	2回戦 敗退	Best32	Best8	Best8	Best16	best32	Best16	準優勝
選手権	地区予選 敗退	地区予選 敗退	県大会 初出場	県大会 2回戦	県大会 準優勝	県大会 2回戦	県大会 best8	県大会 best16	県大会 best8
リーグ戦 (L:リーグ)	阪神L 3部降格	阪神L 2部昇格	阪神L 1部昇格	県2部L 昇格	県2部L 残留	県2部L 残留	県2部L 残留	県1部L 昇格	県2部L 降格

4.2.2 大学の成績

表10は2010年度から現在までの大会成績である。大学は関西学生リーグにおいて、2013年に一度降格を経験するも、その後は2部Bリーグを継続し、就任から10年目に当たる2019年度には、2部Aリーグに昇格することが出来た。表9・表10からの結果の通り、高校・大学ともにチーム力も大会成績も向上していることが伺える。大学の成績向上の要因は、2013年から開始された一貫指導システムの1つである芦屋学園高校からの進学によるものであり、7年間という長期スパンで選手を育成・強化できるシステム構築の確立であるといえる。また、芦屋大学では、2017年度から芦屋学園サッカースクールのコーチに、選手や地域スポーツ指導者コースの学生を起用している。2020年度Jリーグ新人加入選手196名中、大学卒が107名、高校卒27名、下部組織のクラブユース出身者が62名⁸⁾であった。プロチームにおいても、大学4年間の課外活動における専門競技能力の獲得と現場での体験型実習を取り入れることによる「人間力の修養」とサッカー面での「即戦力」の2点を兼ね備えた人材を重視し、契約させる傾向にあると伺える。そのため、芦屋大学ではこのような要素を鑑み、学園のサッカー事業を連携して、地域スポーツ指導者コースの授業展開や課外活動をおこなっている。

表 10 関西学生サッカーリーグでの成績 (2010～2020 年)

大会名/年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
関西学生 リーグ	3 部	3 部	3 部	2 部	3 部	2 部 B	2 部 B	2 部 B	2 部 B	2 部 B	2 部 A
順 位	優勝	3 位	2 位	7 位	優勝	6 位	7 位	7 位	6 位	4 位	9 位
昇降格			昇格	降格	昇格					昇格	

4.3 芦屋学園フットボールクラブの現状

芦屋学園フットボールクラブは、後述するスクール事業の活性化及び芦屋学園高校の下部組織として 2018 年度より開設している。2017 年度より始動した芦屋学園サッカースクール事業から、一貫指導を構築していけるクラブとして開設されたこともあり、スクールから芦屋学園ジュニアユースへと移行するスクール生が多く、表 11 に示す通り、3 年間で 80 名を超える部員数となっている。また、一貫指導の観点から、芦屋学園高校サッカー部の下部組織として学園事業と併設させることとなった。この芦屋学園フットボールクラブは、中高一貫校ではないが、学園と包括的な連携をもって形成することで、中高一貫校と同じような環境を提供することができる学校法人として日本で唯一の学園が管理するクラブチーム組織の開設であるといえる。現在、2020 年度に芦屋学園フットボールクラブの生徒が 4 名芦屋学園高等学校へ進学している。2021 年度も 1 名入学予定である。

表 11 芦屋学園フットボールクラブの部員数

学年/年度	2018	2019	2020
3年	－	－	25
2年	－	25	16
1年	25	16	41
合計	25	41	82

4.4 芦屋学園サッカースクールの現状

4.4.1 サッカースクールの会員状況

2017 年度より芦屋学園一貫指導及び地域貢献活動の一環として、スクール事業を開設した。初年度は小学生の 4 クラス (8 歳以下, 10 歳以下, 12 歳以下, ゴールキーパーコース) から始動し, 2018 年度に幼稚園クラス, 2019 年度にはキッズクラス, 小学生エリートコース, 大人のサッカースクールの 3 コースを増設, 現在合計 6 コースのスクール事業を展開している。2019 年度には 1 年間で 250 回以上のスクール活動を実施した (表 12)。2020 年度はコロナ禍の影響もあり, 実施回数は伸び悩んだが, 通常通りの生活に戻れば, 今後 300 回を超える活動実施回数が見込まれる。

また, この地域貢献活動には, すべてのカテゴリーに芦屋大学生がコーチとして帯同している。大学生と一緒にプレーを実施, また, コーチとしてアドバイスや指導をおこなえる環境を構築している。これは, 保健体育教員やスポーツ指導者を目指すサッカー部員への実践演習の場となっており, 学生満足度の向上を図っている。2018 年度以降は, 「コーチング法基礎 (1 年時)」「コーチング法演習 I:サッカー (2 年時)」の地域スポーツ指導者コースの演習とも連携しており, この活動に大学生 (主にサッカー部生や地域スポーツ指

導者コースの履修生) が関わることで、幼児から大人までの多世代の人々と接する機会を設け、体験実習と人間力の向上に努める環境づくりが提供出来ているといえる。

次に表 13 は、4 年間のスクール会員数を示している。開設当初は 20 名程度であったスクール会員は、2020 年度には約 6 倍の会員数まで達している。この背景には、幼稚園から社会人までの一貫指導システムの構築や各カテゴリーにおける成績の向上などが影響していることが伺える。また、SNS や保護者の口コミなども会員増加の一助となった。スクール会員の保護者からは、大学生がスクールのスタッフとして指導してくれることについて、「お兄ちゃん先生が指導してくれるのが楽しい」「沢山褒めてくれるのが嬉しい」との意見が挙がった。環境面では、「各部門で専門のスタッフが充実していることで、高い技能が身に付けられる」「活動施設が人工芝であることや夜間照明などが充実していることがありがたい」などの意見も挙がっている。しかし、一方では「活動人数の割合に対して施設の更衣場所や雨・風よけ施設がないのでそういった施設が欲しい」との要望もあり、これに関しては、今後事業を拡大する上での検討事項といえる。

表 12 4 年間のスクール実施回数

カテゴリー	幼稚園	Kids	U-8. U-10	U-12. GK	スペシャル	大人	年間活動
曜日	月曜日のみ	火曜日のみ	月曜日/水曜日	月曜日/水曜日	水曜日のみ	水曜日のみ	合計
年度/回数	週1回	週1回	週2回	週2回	週1回	週1回	回数
2017年	-	-	79	82	-	-	161
2018年	22	-	91	91	-	-	204
2019年	32	33	78	78	30	30	281
2020年	12	29	56	56	29	29	211

表 13 4 年間のスクール会員数

カテゴリー	幼稚園	Kids	U-8. U-10	U-12. GK	スペシャル	大人	合計
曜日	月曜日のみ	火曜日のみ	月曜日/水曜日	月曜日/水曜日	水曜日のみ	水曜日のみ	合計
年度/回数	週1回	週1回	週2回	週2回	週1回	週1回	人数
2017年	-	-	8	12	-	-	20
2018年	14	-	17	14	-	-	45
2019年	10	8	10	11	12	10	61
2020年	43	9	36	9	13	14	124

4.4.2 大学生を対象としたスクールアンケート

芦屋学園のスクール活動に参加した大学生(83名)を対象に「1年間のスクール活動に参加した感想」についてのアンケート調査をおこなった。なお、原文における意味やニュアンスを変えないように修正を加えて記載している。

1年生
<ul style="list-style-type: none"> ・「実際にものを教えることの難しさを知ることができ、子供たちとのふれあいもできたので良かったです。また、小さい子供たちから学ぶこともありました」 ・「スクール指導をするにあたって、どのような言葉遣いで接すればよいのか学ぶことが出来た。将来に向けてよいトレーニングとなった」 ・「スクール活動に参加し、活動の意図や理解が低く、スタッフから指導を受けたが、慣れていくにつれて、子供たちとのふれあいや指導方法が身につく良い機会だと感じるようになった」 ・「スクールで行動の速さや、気が利くなど、子供たちを相手にどのような対応をするかなど学ぶことが多くてやりがいがある」 ・「小学生年代にサッカーを通じてアドバイスができ、教育者として必要なことを学べるいい機会だと思う」
2年生
<ul style="list-style-type: none"> ・「コミュニケーションの取り方、言い回し方などを大切にして、園児や小学生との関わり方を考えるようになった」 ・「スクールで学んだことは、小さい子の接し方や大人の教え方やとらえ方が違うので、セッションの意図を伝えるのが難しかった」 ・「話をする際に視線を合わせることなど、それぞれの子供たちに対する対応の仕方を学んだ」
3年生
<ul style="list-style-type: none"> ・「子供というのは本当に純粋であり、自分が思っているよりも物事を深く多く考えていると思った。今後もその子供たちとたくさん関わることに慣れていこうと思う」 ・「少しやる気のない子どもに対する接し方や教え方を学んだ」 ・「子供たちのみる目、意外と見てるんだな！と感じました」
4年生
<ul style="list-style-type: none"> ・「小学生を教えることにより、教えてもらう立場から教える立場になり、自分達が練習を考えたりするのはとても大変だし、それを実際に子供たちに教えながらやるのはとても難しいけど、その分、子供たちの楽しんでいる姿を見て、指導してもらえありがたさや子供の元気にとっても考えることが多く良かった」 ・「子供をみながら自分のプレーの整理ができ、教職をとる学生にとってはうってつけの機会であり、指導方法や間のとり方、コミュニケーション能力などをたくさん学んだ」 ・「過去3年間スクールを経験し、多くの子供たちがいて指導の面で難しいと思ったこともありましたが、年数を重ねるごとに段々と指導が楽しいと思えるようになりました」

以上のアンケート結果をまとめると、1年生は、「学び」「ふれあい」「勉強」「機会」などの初心的なキーワードが多かった。2年生は、初心的な意見よりも「接し方」「対応」「意図」「とらえ方」「言い回し」などの指導方法に関するキーワードが多く見られた。3年生は自分のことも含め、相手（子供たち）のことについても触れている意見が多く、「子供たちは純粋であり、深く物事を考えていると感じた。」「年齢やレベルにあった指導を心がけないといけない」など、指導者目線のコメントになっている傾向にあった。4年生は、経験値も高くなり、広い見解からコメントが挙がっていた。「指導できる有り難さ」「子どもに逆に考えさせられた」「子どもを観ながら自分のプレーや行動の整理」など、教職の取得希望者、指導者を目指したい学生にとって、このスクール指導の機会が人間力向上や指導力向上の一助になっていることがうかがえる。

5. まとめ

5.1 結論

本研究では、芦屋学園サッカー部門の改革事例を分析し、サッカー競技を含む課外活動における一貫指導システム構築のための有用な知見を得ることを目的とした。その分析結果は、下記の通りである。

- ・現在サッカー界のトレンドである一貫指導システムは、芦屋学園においても10年間をかけて構築されたものである。そのシステムはサッカー部門における中学校から大学までの9年間の指導組織であり、幼少期から大人までのスクール事業も含めた長期一貫指導システムを構築することが出来た。(表14)
- ・一貫指導システムが組織的に確立されたことで、学校法人芦屋学園で理想形の育成環境を作り上げることができ、芦屋学園並びに芦屋市のサッカー協会に対して、延いては、日本のサッカー界の人材育成や競技力向上に、今後大いなる期待が持てる事業に発展していくことが期待できる。
- ・芦屋学園フットボールクラブのような中学生部門で、地域に根差したクラブチームを学校が確保できていることは、日本国内でも稀であり兵庫県では唯一である。
- ・各カテゴリーのスタッフ陣が互いに繋がり合っており、スクール事業においては、大学生へのインターンシップの環境にもなっている。
- ・各部門の会員・部員の増加が、芦屋学園への進学人数の増加にも繋がっている。

以上のことから、芦屋学園サッカー部門では、サッカー競技を専門とするコーチによる基礎的指導や一貫指導における連携システムの環境を備えていることが明らかとなった。プロ選手が輩出できる環境と社会に必要とされる人材育成の両方を修得できるシステムとして妥当性を持つといえる。

表14 芦屋学園サッカー部門における一貫指導システム

	対象		名称	目的
ステージ1	芦屋学園 サッカースクール	キッズ～低学年	ファンダメンタルの 段階	<ul style="list-style-type: none"> ・あらゆる基本的な運動スキルの学習 ・簡単なボール操作の獲得 ・個人の基礎技術の獲得
ステージ2		高学年	練習を学習する段階	<ul style="list-style-type: none"> ・あらゆる基礎的なスポーツスキルの学習 ・複雑なボール操作の獲得 ・個人の応用技術の獲得
ステージ3	芦屋学園中学校	芦屋学園 フットボールクラブ	トレーニングを 練習する段階	<ul style="list-style-type: none"> ・持久力と筋力の基礎作り ・個人戦術の理解促進 ・グループ戦術の理解促進
ステージ4	芦屋学園高等学校	サッカー部 アスリートコース	競技の トレーニング段階	<ul style="list-style-type: none"> ・競技に必要なフィットネスの最適化 ・チーム戦術の理解促進
			勝利を目指した トレーニング段階	<ul style="list-style-type: none"> ・フィットネスとスキルにおいて競技人生 最大レベルの確立 ・プロフェッショナルプレイヤーの育成
ステージ5	芦屋大学	サッカー部 地域スポーツ指導者コース	勝利を目指した トレーニング段階	<ul style="list-style-type: none"> ・フィットネスとスキルにおいて競技人生 最大レベルの確立 ・世界レベルで活躍できる人材の育成
			マネジメント	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ指導者、競技役員、 マスターズ、個人経営、スポーツ関連 企業などで競技に関わるための学習
ステージ6	芦屋学園大人の サッカースクール	社会人	リタイア期	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチや役員としての貢献 ・健康維持増進

5.2 今後の展望と課題

芦屋学園サッカー部門における一貫指導システムにおいて、長期一貫指導による競技力向上や人間力形成の構築ができるだけでなく、インターンシップなどでその後のキャリアを一助する環境まで構築している。しかし、今後はシステム構築に沿った明確な指導内容や環境を整えていかなければならない。この一貫指導システムを強固にし、発展させるための課題として、まず第一に、芦屋学園及び芦屋市との更なる連携が必要不可欠であることが示唆される。次に、イベント開催やスポンサー契約等、地域や企業と連携する機会を増やすことで、芦屋学園がより一層の認知度を得る環境づくりに繋がることを示唆される。本学園で上述しているような一貫指導をおこなっているのは、現在サッカー部門だけである。今後は、他の課外活動においても、サッカー部門の一貫指導システムの構築をモデルにし、様々な競技に展開していくことで、学園の繁栄と発展の一助となる有用な知見を得ることができると考えられる。

6. 謝辞

本研究の分析に関して、芦屋学園サッカー部門に関する様々な貴重な資料を御提供いただき、また、一貫指導システムの構築について、論旨の展開に貴重な指導と助言をいただいた以下の皆様に対し、ここに記して深謝致します。

芦屋学園高校サッカー部：許泰萬, 崔聖健, 倉本仁志, 吉本英寛

芦屋学園フットボールクラブ：小川和志, 加藤琢馬

芦屋学園サッカースクール：新開英幸, 河合学, 望月航介

参考文献

- 1) 永野翔大・ネメシュ ローランド・藤本元・會田宏：ハンドボール競技における強豪国と日本の一貫指導プログラムに関する比較研究. コーチング学研究, 第30巻第2号, 109~123, 2017.
- 2) 蔵元彩・鈴木淳：バスケットボールにおける一貫指導システムの現状と課題ーサッカーの一貫指導システムとの検討ー. 福岡教育大学紀要, 第62号, 111-118, 2013.
- 3) 原朗・榎本至：水球競技の長期一貫指導型競技者育成プログラム. 東京情報大学研究論集, 9(1), 21-33, 2005.
- 4) 日本サッカー協会 ホームページ：<http://www.jfa.or.jp/>, (参照日：2020年1月6日).
- 5) 「少数こそアイデンティティー」なぜ大阪朝高ラグビー部は部員数39人で全国大会4強入りできたのか?：
<http://news.yahoo.co.jp/byline/kimmyungwook/20210106-00216216/>, (参照日：2021年1月6日).
- 6) Football Focus～高校&FC 一体で育成～：朝日新聞, (参照日：2021年2月11日).
- 7) サッカーデータバンク：<https://soccer-db.net/>, (参照日：2020年12月12日).
- 8) Jリーグプロ内定・新規加入選手数推移 (大学・高校・ユース) 2001年～2021年：
<http://no-football-no-life.com/2019-new-player-affiliated-team/>, (参照日：2021年1月20日).